

接続法未来の後退に関する一考察： マタイ福音書諸版をめぐって（5）

水 戸 博 之

キーワード：接続法未来、スペイン語、文法、聖書

先行する論考（4）においては、時の副詞節を中心に、エスコリアル写本（M.E.II.6）とレイナ・バレラ 1909 年版との接続法未来が共通に使用されている箇所を検討を行った。

本稿では、副詞節の中で場所と譲歩の用法について検討を行い、マタイ福音書諸版の比較対照において表れる接続法未来の後退の諸相を考察することを終了する。なお、本稿において主に検討の対象となる版は、エスコリアル写本、レイナ・バレラ諸版、カトリック系の訳または版として 3 言語対照 Bover 訳、スペイン語共同訳（La Biblia de Estudio, 2002 以下 BE）である。

5. 場所の副詞節

接続法未来の使用が見られる場所の副詞節の章節は以下のとおりである。

6.21; 8.19; 10,11; 18.20; 24.28; 26,13

5. 1 レイナ・バレラ 1909 年版 RV) における接続法未来

6 章 21 節

ME) Ca o es to thesoro, allí es to corazón.

RV) Porque donde estuviere vuestro tesoro, allí estará vuestro corazón.

RV2,3) Porque donde esté vuestro tesoro, allí estará también vuestro corazón.

B) ὅπου γὰρ ἐστὶν ὁ θησαυρός σου, ἐκεῖ ἔσται καὶ ἡ καρδία σου.

ubi enim est thesaurus tuus, ibi erti et cor tuum.

Porque donde está tu tesoro, allí estará también tu corazón.

AM) Porque donde *tengas* tu riqueza tendrás el corazón.

BE) Porque donde *esté* tu riqueza, allí estará también tu corazón.

あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。

ME) は、一見するとかなり距離を感じさせるが、現代語との対応は次のとおりである：Ca (< lat. quia) = Porque; o (< lat. ubi) = donde; to = tu。動詞は *estar* ではなく、*es < seer (ser)* の存在の用法であり、直説法を採っている。

RV) が接続法未来を使用している唯一の版であるが、レイナ・バレラ系諸版は、第19節から第21節にかけての命令の対称となる2人称とその所有形容詞の関連についても、独自の表現を行っている。すなわち、第19・20節において、2人称複数命令であることに呼応させて、1909年版のみならず1960年版RV2)、1995年版RV3) 至るまで一貫して *vuestro* と所有者が複数の所有形容詞を使用している点である。ギリシア語原典では、属格ではあるものの所有者は2人称単数であり、ラテン語では2人称単数の所有形容詞であり、これを他のスペイン語訳は、ME) をはじめとして、AM) *el corazón*。を除き、継承している。なお、所有形容詞の位置に関しては、2古典語が名詞に後置するのに対し、スペイン語訳はすべて前置している。レイナ・バレラ版一種の文献批判的校訂による合理化を行ったのであろうか。一方、他のスペイン語諸版、Nova Vulgata、The Greek New Testament (第3版)、Bover 版を見ても、このような合理化は全くなされていないし、写本等の異同の記載もみられない。

先行する第19・20節を見てみよう。

6章 19・20節

- ME) **No fagas tesoros en tierra, 20 mas **fazet** tesoros en el cielo, ...**
- RV) **No os hagáis tesoros en la tierra,... 20 Mas haceos tesoros en el cielo, ...**
- RV2,3) **No os hagáis 20 sino haceos tesoros en el cielo,**
- B) **Μὴ θησαυρίζετε ὑμῖν θησαυροὺς ἐπὶ τῆς γῆς, ...**
20 θησαυρίζετε δὲ ὑμῖν θησαυροὺς ἐν οὐρανῷ,
Nolite thesaurizare vobis thesauros in terra,
20 thesaurizate autem vobis thesauros in caelo, ...
- No atesoréis tesoros sobre la tierra, ... 20 atesoraos más bien tesoros en el cielo, ...**
- AM) **Dejaos de amontonar riquezas en la tierra, ... 20 En cambio, amontonaos riquezas en el cielo, ...**
- BE) **No acumuléis riquezas en la tierra, 20 Acumulad más bien vuestras riquezas en el cielo, ...**
あなたがたは地上に富を積んではならない。・・・20 富は、天に積みなさい。

エスコリアル写本の19節について、否定命令の接続法現在2人称単数になっていることが注目される。校訂者 T. Montgomery は、語彙集 p.221 *fazer* の項、活用形リストで、

明確に、この 6,19 を *fagas (hagas)* の使用箇所として挙げ、誤写とは考えずに、複数形 *fagades (hagáis)* と区別していることである。他方、2 人称単数と複数の混同あるいは混用の例という指摘もしていないようである。対応箇所の古典語原典はいずれも 2 人称複数形であり、筆者の所有する訳や版で他に 2 人称単数を採用しているものや文献的異同を指摘しているものはやはり見出されない。ME) は、レイナ・バレラとは逆に、第 21 節の所有形容詞 2 人称単数を第 19 節の命令形を単数にすることにより、合理化しようとしたのであろうか。

所有形容詞に関連して、第 19 節には、古典語の 2 人称複数与格代名詞との対応で、興味深い異同が見られる。ME) は再帰代名詞にも所有形容詞にも反映させていない。いずれのレイナ・バレラ版も再帰代名詞 *os* に訳出して、所有形容詞には対応させていない。他のスペイン語訳においては、前半の否定あるいは制止の命令句では再帰代名詞が使用されていない点が注意を引く。AM) においては、第 19 節で見出されるのは、助動詞的な *dejarse de + 不定詞* (…するのをやめる) の再帰代名詞であり、動詞 *amontonar* (積み上げる) の間接的な再帰代名詞は第 20 節に表れる。古典語の与格に対応する再帰代名詞と所有形容詞の併用は見られない。所有形容詞 *vuestras* (あなたがたの) は、BE) 第 20 節にのみ使用が認められる。その他、日本語訳で *En cambio; más bien* (代わりに;むしろ) に対応する語句が共同訳にも文語訳にも見られない点が興味深い。

2 人称とそれに対応する待遇表現との関係は、スペイン語圏の現状を見ても、スペインにおける *vosotros / vosotras* と中南米における *ustedes*、あるいは 2 人称単数としてアルゼンチンなどで使用される *vos*、さらに各代名詞と動詞活用形との対応などかなり多様である。ところで、AM) では、*vos* は 2 人称複数として一貫しており、人称変化の一致における 2 人称単数 *tú* との混用や用法の揺れは見られないようである。一方この箇所は、AM) の訳者あるいは筆者は、*vos* と *tú* との対照を言語的に明確に意識していたゆえに、古典語の複数から単数への変化を合理化しようとしたと考えられないだろうか。

8 章 19 節 レイナ・バレラ 1909 年版 RV) とヴルガタ訳の対応

ME) E acostos a el un ensennador de la ley, e dixol: Maestro, seguir te o quier que *tu vayas*.

RV) Y llegándose un escriba, le dijo: Maestro, te seguiré á donde quiera que fueres.

RV2) Y vino un escriba y le dijo: Maestro, te seguiré adondequiera que *vayas*.

RV3) Se le acercó un escriba y le dijo: — Maestro,

B) Καὶ προσελθὼν εἷς γραμματεὺς εἶπεν αὐτῷ Διδάσκαλε, ἀκολουθήσω σοι ὅπου ἔαν ἀπέρχῃ.

Et accedens unus scriba ait illi: ((Magister, sequar te quocumque ieris)).

Y llegándose un escriba, le dijo: Maestro, te seguiré adondequiera que *partas*.

AM) Se le acercó un letrado y le dijo: — Maestro, te seguiré *vayas adonde vayas*.

BE) Se le acercó entonces un maestro de la ley, que le dijo: — Maestro, deseo seguirte adondequiera que *vayas*.

そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。

ME) の言語について、T. Montgomery によると現代語との対応は以下ようになる。
acostos < *acostóse *acostarse = acercarse a ...; seguir te < *seguir-te-he = te seguiré¹

RV) のみが接続法未来形をとっている。主文は、BE) の願望の助動詞現在形 + 不定詞 *deseo seguirte* の例を除き、古典語を含めすべて未来形である。古典語の副詞節に関して、ギリシア語は ὅπου ἐάν + 接続法現在形をとり、ラテン語が先立未来あるいは接続法完了をとっている。岩隈注によれば、ὅπου は ὅποι の意味であるとされる。² ところで、前者は静止した場所の関係副詞であり、後者は方向や目的地を表す関係副詞である。この点に関し、他の訳がすべて何らかの運動の方向性を前置詞や接頭辞としての *a* などにより表現している一方、ME) のみに表れないのは、ギリシア語原典の関係副詞の用法のずれをあえて反映させたものであろうか。また、ME) は、スペイン語訳の弱勢代名詞 *te* に関して、綴りは分離されているものの、ポルトガル語においては現代の書き言葉にも使用される *mesóclise* (動詞の活用語形の中に代名詞をいれること) に類似した語順と形態を採っている。³ 他に AM) が *vayas adonde vayas* (たとえあなたがどこへ行こうとも) と接続法を反復した譲歩的表現をとっている点に注意を引く。

この箇所は、レイナ・バレラ 1909 年版における法時制の特徴といえ、ヴルガタ訳：先立未来 (または接続法完了) を RV) : 接続法未来で訳出している。対応するラテン語 *ieris* (*iveris*) は、ここでも未来における完了性と不定性・未定性の接続法の二つの機能を担っていると考えられる。ところで、二つの機能のいずれが主たる要素であろうか。形式的には、主文が未来であるところから、未来における先行・先立性や完了性に重点があるように思える。

10 章 11 節 レイナ・バレラ 1909 年版 RV) とヴルガタ訳の対応

ME) En qual ciudat quier que *entredes*, o en cual castiello, preguntat qual es ombre bono, e estat alli fasta que *salades* end. *end (e) = de alli

RV) Mas en cualquier ciudad, ó aldea donde entrareis, investigad quién sea en ella digno, y reposad allí hasta que salgáis.

- RV2) Mas en cualquier ciudad o aldea donde *entréis*, informaos quién en ella sea digno, y posad allí hasta que salgáis.
- B) εἰς ἣν δ' ἂν πόλιν ἢ κώμην εἰσέλθητε, ἐξετάσατε τίς ἐν αὐτῇ ἄξιός ἐστιν· κάκει μείνατε ἕως ἂν ἐξεέλθητε.
In quaecumque civitatem aut castellum *intraveritis*, interrogate quis in ea dignus sit; et ibi manete donec *exeat*.
Y en la ciudad o aldea en que *entréis*, averiguad quién haya en ella digno, y quedaos allí hasta que partáis.
- AM) Cuando *entréis* en un pueblo o aldea, averiguad quién hay allí que se lo merezca y quedaos en su casa hasta que os vayáis.
- BE) Cuando *lleguéis* a un pueblo o aldea, buscad a alguien digno de confianza y quedaos en su casa hasta que salgáis de allí.
町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。

この箇所興味深い点は、RV)の場所の関係副詞節における *entrareis* のみが接続法未来であり、その箇所に対応するヴルガタ訳が、先立未来または接続法完了の *intraveritis* を採っていることである。ラテン語後半部の時の副詞節が接続法現在であり、他のスペイン語訳が接続法現在を使用する中で、この差異は何を意味しているのだろうか。ギリシア語原典はいずれも *ἂν* + 第2アオリスト接続法である。

不定・未定性 + (完了・先行性) 主文：命令

主文はいずれの言語・訳も命令形を採っている。副詞節に関して、古典語をはじめ全ての版で共通な要素は接続法によってあらわされる「不定・未定性」と言えよう。では、ヴルガタ訳とそれをスペイン語に訳出しようとしたRV)の編訳者たちは、何を完了語幹の法時制により表現しようとしたのであろうか。この箇所では、主文が命令法であることから、日本語共同訳「町や村に入ったら」が条件に表現しているように、仮言的であり、より接続法的であると言える。名称上の接続法の時制が、非現実語法の用法のように、直説法におけるような過去・現在・未来の時系列と必ずしも対応しないことは、規範文法あるいは学校文法の示すとおりである。このことは、また、接続法過去や過去完了で表現された条件節に対する過去未来形・過去未来完了形の帰結節（条件節が接続法 *se* 形の場合、帰結節は接続法 *ra* 形）の対応が、条件と結果の因果性を示してはいても、副文節（副詞節）と主節との間に存在する、先行性あるいは完了性と未来形や命令法によって表現される未然の後時性の繋がりには必ずしも示しえないということの意味するのではないだろうか。それゆえ、その空白あるいは欠落を補

てんしうる二つの性質を兼ね備えた法時制として接続法未来を法時制体系の中で位置づけることは可能ではないだろうか。

法の差異でもう一つ注意すべきは、直接目的語の形容詞となっている BE) を除く、間接疑問文「ふさわしい人はだれか」の箇所直説法と接続法の例が見られる点である。おもしろいことに、ME) とギリシア語が直説法現在形 *es, ἐστίν* である一方で、対応する繫辞を使用したラテン語と他のスペイン語訳では接続法現在形 *sit, sea* を採っている。さらに、スペイン語訳には、間接疑問文を存在文の形式にしているものがあり、やはり二つの法の使用が見られる。

AM) *quién hay* (直説法) *que se lo merezca* (接続法) / B) *quién haya digno* (接続法)

現代スペイン語では、間接疑問中の動詞は古典期以降のラテン語が接続法を使用するのはことなり、通常、直説法である。

5.2 エスコリアル写本における接続法未来

18章 20節 エスコリアル写本 ME) とギリシア語原典との対応

ME) *Ca o dos o tres fueren ayuntados en el mio nombre, yo so en medio dellos.*

RV) *Porque donde están dos ó tres congregados en mi nombre, allí estoy en medio de ellos.*

B) *οὗ γάρ εἰσιν δύο ἢ τρεῖς συνηγμένοι εἰς τὸ ἐμὸν ὄνομα, ἐκεῖ εἶμι ἐν μέσῳ αὐτῶν.*

Ubi enim sunt duo vel tres congregati in Nomine meo, ibi sum in medio forum.

Pues dondequiera que estén dos o tres reunidos en mi nombre, allí estoy yo en medio de ellos.

AM) *..., pues donde están dos o tres reunidos apelando a mí, allí, en medio de ellos, estoy yo.*

BE) *Porque donde dos o tres se reúnen en mi nombre, allí estoy yo en medio de ellos.*

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にあるのである。

場所の副詞節において、ME) のみが助動詞に *seer* (*ser*) 接続法未来形を使用した一種の完了体であり、B) のスペイン語訳が *estar* 接続法現在と過去分詞による状態を示す完了である他は、2 古典語を含め、すべて助動詞部分 (直説法現在) + 分詞である。主文の動詞は、全て直説法現在一人称単数形である。スペイン語において、ME) は *estar* ではなく *so* < *seer* (*ser*) であり、BE) は *se reúnen* で、再帰代名詞を伴い自動詞的用法となっている。ところで、BE) を除き、副詞節と主節は、完了と未完了の対比が語形的に認められるのであるが、ギリシア語においてはさらに *συνηγμένοι* (< *συνάγω*) 完了分詞受動態男性複数と分詞自体に完了形が使用されていることが注意を引く。聖書ギリシ

ア語にも精通していたと思われる ME) の編訳者は、この語形を接続法未来形によってスペイン語に反映させようとしたのではないかと思われる。結局のところ、ME) において接続法未来形によって表現しようとしていたことは、接続法の不定・未定の事柄や蓋然的条件であるよりは、むしろ、ギリシア語の完了分詞の先時あるいは先行性であるように思われる。

ところで、以上のことから、ME) と RV) および Bover 訳の 2 古典語原典に対するそれぞれの姿勢の差異といったものが見出されないだろうか。すなわち、いずれのスペイン語訳も接続法未来が使用可能な文体でありながら、この箇所のみならず選択が分かれる場合があるのは何故かということである。ME) の言語は古スペイン語であり、スペイン語の成立過程の過渡的な要素が多数見出される。多くの近代語の成立過程において、聖書の各言語への翻訳が規範的な文法や文体の確立に多大な影響を与えたことは、古くは 9 世紀の古代教会スラヴ語、16 世紀のルター訳聖書、17 世紀の欽定英訳聖書の例を見れば明らかである。

一方、RV) はヴルガタ訳を規範にしつつ、接続法未来を、ラテン語における直説法先立未来あるいは接続法完了のスペイン語における対応する法時制として、定式化しようとする意図があるように思われる。さらに、Bover 訳は、3 言語対照版において可能な限り古典語原典を尊重しながらも、あくまでスペイン語文としての自律性を維持しているかに見える。

5.3 レイナ・バレラ 1909 年版 RV) と 1960 年版 RV2) における接続法未来

24 章 28 節 レイナ・バレラ 2 版とヴルガタ訳との対応、副詞節と主節の関係

ME) *O quier que sea el cuerpo, alla sallegaran* las aguilas. *sallegaran = se allegarán⁴*

RV) Porque donde quiera que estuviere el cuerpo muerto, allí se juntarán las águilas.

RV2) Porque dondequiera que estuviere el cuerpo muerto,

RV3) *Dondequiera que esté* el cuerpo muerto,

B) *ὅπου ἐάν ᾗ τὸ πτώμα, ἐκεῖ συναχθήσονται οἱ ἀετοί.*

Ubicumque fuerit corpus, illuc congregabuntur aquilae.

Dondequiera esté el cadáver, allí se juntarán las águilas.

AM) Donde se reúnen los buitres, está el cadáver. (はげ鷹が集まる所には、死体がある。)

BE) ¡Donde está el cadáver, allí se juntarán los buitres!

死体のある所には、はげ鷹が集まるものだ。

まず、この箇所注目すべき点は、接続法未来使用のスペイン語訳がレイナ・バレ

ラ版であり、しかも RV) のみならず 1960 年版 RV2) においても用いられることと、接続法未来がラテン語の先立未来あるいは接続法完了と対応していることである。この箇所も、レイナ・バレラの翻訳者たちが接続法未来をラテン語の法時制との関係で位置づけようとした例の一つと言えよう。

さらにスペイン語諸訳の間で見られる所見として、古典語、特にラテン語との対応で、場所の副詞節を導く接続詞 *donde* が動詞 *querer* の接続法現在 *quiera que* を伴った形で不定性や蓋然性を強調している訳では、動詞は接続法である。なお、古典語との対訳である B) が接続法現在である点が注意を引く。Bover 訳が接続法未来ではなく接続法現在を使用した理由として考えられることは、副詞節の主節に対する先時性・先行性よりも蓋然性に重点を置いて訳出しようとしたからと思われる。

ところで、主節の動詞の法時制について興味深い異同が見られる。すなわち、AM) が接続詞 *donde* で導かれる直説法現在である以外は、古典語を始め、すべて直説法未来を採っているが、この箇所 AM) は副詞節と主節を入れ替えて、両者を直説法現在で表現している点である。もう一例、スペイン語共同訳 BE) が、副詞節：接続詞 *donde* + 直説法現在、主節：直説法未来の構文を採っている。副詞節と主節との関係において、最も必然性が強い、あるいは普遍的な真理としての表現と言えるのは両者が直説法現在の場合である。この「マタイによる福音書」24章28節と同内容の文は、「ルカによる福音書」17章37節と、さらに旧約に遡り「ヨブ記」39章30節に見いだされ、元は諺であったとされる。⁵ スペイン語共同訳 BE) の訳注では、この箇所の可能な解釈として、参集するはげ鷹によって遺体の存在が明らかにされるように、「人の子」の到来は全ての人に明らかな徴を伴うと、説明されている。BE) のテキストは伝統線上のものといえるが、訳注による解釈は、むしろ副詞節と主節を入れ替えた AM) のテキストに近いように思われる。⁶

これらの箇所を以下に示す。

ルカによる福音書 17章37節 Lc 17 37

ME) O *quier que fuer* el cuerpo, allí seran allegadas las aquilas.⁷

RV) RV2) *Donde estuviere* el cuerpo, allí se juntarán también las águilas.

RV3) Donde esté el cuerpo, allí se juntarán también las águilas.

B) Ὃπου τὸ σῶμα, ἐκεῖ καὶ οἱ ἀετοὶ ἐπισυναχθήσονται.

Ubicumque fuerit corpus, illuc congregabuntur et aquilae.

Donde estuviere el cuerpo, allí también se juntarán las águilas.

AM) Donde se reúnen los buitres, allí está el cuerpo.

BE) *Donde esté el cadáver, allí se juntarán los buitres.*

死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。

この箇所を一覧にまとめると以下のようになる。

ME) :	接続法未来	直説法未来
RV)RV2) :	接続法未来	直説法未来
RV3) :	接続法現在 (接続法未来 → 接続法現在)	直説法未来
Gr. :	なし (24,28 (ἐ)ὄν ἦ̄: 接続法現在)	直説法未来
Lat. :	先立未来 (接続法完了)	直説法未来
B) :	接続法未来	直説法未来
AM) :	直説法現在	直説法現在 (副詞節 ↔ 主節)
BE) :	接続法現在	直説法未来

まず、スペイン語訳に関して副詞節と主節の動詞を見ると、AM)を除き、前者においては所在の *estar* または *seer (ser)* であるのに対し、後者は近現代スペイン語訳では *juntar* (集める) の自動詞化の再帰代名詞を伴った未来形である。ME) で *seran allegadas* と受動態未来形になっている点が注意を引く。T. Montgomery 校訂のマタイ福音書の注解によれば、過去分詞は本来の受動の意味を保存しているものの、多くの例外があり、いくつかの動詞の受動形は再帰形と同義であると考えられるが、この箇所はその一例と言えよう。⁸

レイナ・バレラ系の版では、1960年版 RV2) まで接続法未来が使用され、現代語版と言える 1995年版 RV3) において接続法現在に代替されている。

Bover 訳はここでは接続法未来を用いている。前掲箇所との異同は、ヴルガタ訳の不定的な場所の接続詞 *ubicumque* の訳が、*dondequiera que* から *donde* に変化している点である。*-quiera que* の不定性や譲歩の意味があるとすれば、単独形の場所の接続詞 *donde* に接続法未来形の語幹の持つ先時性や完了性が付加されたと考えられるであろうか。Bover 訳では、*dondequiera que* の副詞節には接続法現在ばかりでなく接続法未来 (26章13節、後述) が用いられている。また *dondequiera que* + 接続法現在の主節には、直説法現在 (18章20節) と直説法未来 (24章28節) が用いられている。法時制の選択の基準は、かなり微妙な差異によるとも思われるが、文法的というよりは、むしろ文体論的な事柄に依拠するものであろうか。

BE) における副詞節：接続法現在／主節：直説法未来の対応は、現代語で不定・未定の時や場所における蓋然性を表現する際に使用される標準的な組み合わせである。なお、ここでも Alonso-Mateos 訳 AM) は主節と副詞節の内容を入れ替え、両者を直説

法現在に表現している。

「ヨブ記」の対応箇所を、他の版や訳を補い検討してみよう。

ヨブ記 39章30節 Job 39 30

e onde ay matados ende es. ay = hay; ende = de allí⁹ (Ms. Escorialense I-I-4, S.XIV)¹⁰

RV) Y donde hubiere cadáveres, allí está.

RV2) Y donde hubiere cadáveres, allí está ella.

RV3) donde haya cadáveres, allí está ella

(νεσσοὶ δὲ αὐτοῦ ἑκείνην ...) Οὐδ' ἄν ὡς τεθνεῶτες, παραχρῆμα
εὐρίσκονται.

(Septuaginta, ed. Alfred Rahlfs)

et, ubicumque cadáver fuerit, statim adest.

y donde hubiere cadáveres, allí está ella. (Nácar-Colunga, 1976)

donde hubiere muertos, allí está. (ed. Herder, 1976)

AM) donde hay carroña, allí está ella.

BE) y donde hay cadáveres, allí se la encuentra.

(鶯は) 死骸の傍らには必ずいる。

意外な感があるのは、14世紀のエスコリアル I-I-4 写本において、副詞節・主節共に直説法現在が AM) BE) のように使用されている点である。もし仮に接続法未来形ならば *ouiere* となるはずである。¹¹ 当時のユダヤ系の人々 *sefaradi* の言語的特質の反映なのであろうか。

ヴルガタ訳を含め主節は全て直説法現在である。またスペイン語諸版の副詞節内の構文に関しては、*haber* 存在文であるという点では古スペイン語から一貫している。レイナ・バレラ系では、RV) RV2) が接続法未来であり、RV3) において接続法現在になる変化も前掲箇所と同様である。ヴルガタ訳の下に示した1970年代刊行のカトリック系2訳では、接続法未来が維持されている。

この箇所は、比較的近年の訳にまで接続法未来の使用が見られる。前掲のルカ17章37節との法時制の顕著な異同は、主節においてこの箇所が直説法現在を採っていることである。しかも、副詞節・主節ともに動詞は動作や行為を表すのではなく、存在や所在をあらわすアスペクトである。接続法未来形は、如何なる要素を変化させ、または付加するのであろうか。直説法現在をモダリティについて無色あるいは中立の出発点とすると、両者が直説法現在の場合、二つの節の関係は、まず同時並行的と考えられる。接続詞を見る限り、直接的に原因と結果や時系列の関係は表れて来ない。

この箇所諸版を比較しもう一つ興味深い点は、名詞と動詞の数の異同、すなわち単数と複数の相違である。副詞節の「死骸」は、ヴルガタ訳と AM) のみが単数である。一方、主節の動詞は、Septuaginta (七十人訳聖書) を除いて、全て単数である。親鷲 (単数) を主語とするのが通常の見出しであるが、ギリシア語では、雛も含めているのであろうか。このような動詞の数の問題は、 $\epsilon\upsilon\acute{\rho}\iota\sigma\kappa\omicron\nu\tau\alpha$ < $\epsilon\upsilon\acute{\rho}\iota\sigma\kappa\omega$; se la encuentra < encontrar (いる ← 見出される < 見出す) と七十人訳と BE) の間に一種の語彙的な対応を求めることもできる。

また、14 世紀写本の *matados* < *matar(se)*? (殺された者たち? < 殺す: -se 自動詞化?) が、古スペイン語において他動詞の過去分詞が受動的意味から再帰的意味になり名詞化した例である一方、Herder 版の *muertos* < *morir* (死んでいる者たち < 死ぬ) が、現代語における自動詞の過去分詞の名詞化の例という、興味深い対照も見られる。

さらに、古典語とスペイン語訳との対応で、法時制の選択に関連すると思われる相違が見出される。ヴルガタ訳の *ubicumque* は、辞書的には *donde quiera que, en cualquier lugar que* など不定・未定性を含意した接続詞句に通常は訳出される。¹²ところが、いずれのスペイン語訳も単に *donde* と訳出していて、むしろ Septuaginta の $\text{o}\tilde{\upsilon}\ \delta'\ \acute{\alpha}\nu$ + 接続法現在と対応する。他方、主節においては *παρὰχρῆμα* (ただちに) という副詞は、ヴルガタ訳の *statim* とさらにおそらくは *adest* < *adsum* の接頭辞 *ad-* には反映されているが、スペイン語訳の *allí* という副詞には、過去における「その時」といった用法もありうるが、通常、遠称の場所として使用されるのであり、直接対応するとは考えにくい。やはり *allí* = *donde* (副詞節) と考えるべきであろう。ヘブライ語がどのようになっているか検討すべきところであるが、今後の課題としたい。¹³

5.4 エスコリアル写本・レイナ・バレラ RV) における接続法未来とヴルガタ訳との対応

26 章 13 節 エスコリアル写本・レイナ・バレラ RV) ・ヴルガタ訳・Bover 訳

ME) Verdat uos digo que o quier que fuer preigado est Euangelio todo el mundo, dicho sera lo que esta fizo, en remembrance della.

RV) De cierto os digo, que donde quiera que este evangelio fuere predicado en todo el mundo, también será dicho para memoria de ella, lo que ésta ha hecho.

RV2) De cierto os digo que dondequiera que se predique este evangelio, en todo el mundo, también se contará lo que ésta ha hecho, para memoria de ella.

B) ἀμὴν λέγω ὑμῖν, ὅπου ἐὰν κηρυχθῆ τὸ εὐαγγέλιον τοῦτο ἐν ὅλῳ τῷ κόσμῳ, λαληθήσεται καὶ ὁ ἐποίησεν αὕτη εἰς μνημόσυνον αὐτῆς.

Amen dico vobis, ubicumque praedicatum fuerit hoc Evangelium in toto mundo, dicetur et quod haec fecit in memoriam eius.

En verdad os digo, dondequiera que en todo el mundo fuere predicado este Evangelio, se hablará también de lo que hizo ella, para memoria suya.

AM) Os aseguro que *en cualquier parte del mundo donde se proclame* esta buena noticia, se recordará también en su honor lo que ha hecho ella.

BE) Os aseguro que *dondequiera que se anuncie* esta buena noticia se hablará también de lo que ha hecho esta mujer, y así será recordada.

はっきり言っておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。

26章13節に関して、ギリシア原典に対して、ヴルガタ訳も含め、それぞれの訳に独自性が見出されるようである。まず、全てに共通の要素が、主文の動詞が直説法未来であるという点を念頭に考察をはじめることになろう。副詞節についても、共通の要素として「この福音」が主語であり、動詞は、直説法現在以外の法時制をとり、何らかの形で受動態の語形を採っている。

動詞に関して、ギリシア語 κηρυχθη̅ < κερύσσω が単独の統合的語形で接続法受動相第1アオリスト3人称単数形であるのに対し、他の訳は ser あるいは esse を助動詞とした複合的あるいは分析的語形をとるか、比較的近年のスペイン語訳のように再帰代名詞 se を伴った受身形をとっている。ラテン語は、未完了時制の多くにおいて単独形を持っているが、ギリシア語のアオリストを完了に対応させることから、複合的な形態を採っている。¹⁴ なお、古典文法から見た「接続法完了 (perfectum)」であれば、本来 praedicatum sit (過去分詞+接続法現在) となっているはずである。分析的形態あるいは複合形に関して、助動詞と過去分詞の位置関係の異同が注意を引く。対応するスペイン語の箇所はすべて、ser 変化形+過去分詞である。ただし、dicetur に対応する ME) の dicho sera はラテン語の複合形的語順である。¹⁵ もう一点、上掲の訳例で注目すべきことは、接続法未来形を使用している訳がすべて複合形、すなわち助動詞 ser が接続法未来形であるのに対し、接続法現在を使用している訳が再帰代名詞 se の受身用法を採っていることである。接続法現在の受動形ならば、それぞれ sea predicado; sea proclamada; sea anunciada という形を用いることができるはずである。主節においては、RV2)、Bover 訳、AM) においても再帰代名詞 se の受身用法の未来形である。なお、BE) における ...esta mujer, y así será recordada (受動態未来女性単数形) は女性の地位に配慮したものであろうか。女性代名詞としては、ギリシア語原典から全ての訳に表れるが、esta mujer (この女性) と訳出しているのはスペイン語共同訳のみである。

ところで、再帰代名詞 *se* の受身用法であっても動詞部分を接続法未来形にすることは十分可能なはずである。では、なぜ助動詞 + 複合形を選択したかであるが、結局のところヴルガタ訳との対応、すなわちさらに遡れば、ギリシア語のアオリストの先時性や完了性を、この箇所でも表現しようとしたためではないだろうか。接続法未来の主節に対する先行性の一例と考えられる。

6. 譲歩の副詞節

少し引用が長いが、同じ文脈のなかでの用例であるので、同時に取り上げる。

26章33節 26章35節

ME) Recudio Pedro e dixol: Si todos fueren escandalizados en ti, yo numqua sere escandalizado. 34 Dixol Ihesus: Verdat te digo que esta noch ante que cante el gallo, me negaras tres uezes. 35 E dixo Pedro: Aun si me conviniere morir contigo non te negare.

RV) Y respondiendo Pedro, le dijo: *aunque todos sean escandalizados en ti*, yo nunca seré escandalizado. 34 Jesús le dice: De cierto te digo que esta noche, antes que el gallo cante, me negarás tres veces. 35 Dícele Pedro. *Aunque me sea menester morir contigo*, no te negaré.

B) ἀποκριθεις δὲ ὁ Πέτρος εἶπεν αὐτῷ Εἰ πάντες σκανδαλισθήσονται ἐν σοί, ἐγὼ οὐδέποτε σκανδαλισθήσομαι. 34 ἔφη αὐτῷ ὁ Ἰησοῦς Ἀμὴν λέγω σοι ὅτι ἐν ταύτῃ τῇ νυκτὶ πρὶν ἀλέκτορα φωνῆσαι τρίς ἀπαρνήσῃ με. 35 λέγει αὐτῷ ὁ Πέτρος Κἂν δέη με σὺν σοὶ ἀποθανεῖν, οὐ μὴ σε ἀπαρνήσομαι.

Respondens autem Petrus ait illi: ((Et si omnes scandalizati fuerint in te, ego numquam scandalizabor)). 34 Ait illi Iesus: ((Amen dico tibi: In hac nocte, ante Quam gallus cantet, ter me negabis.)) 35 Ait illi Petrus: ((Etiam si oportuerit me mori tecum, no te negabo)).

Respondiendo Pedro, le dijo: *Cuando todos se escandalicen en ti*, yo nunca jamás me escandalizaré. 34 Díjole Jesús: En verdad te digo que en esta noche, antes de cantar el gallo, me negarás tres veces. 35 Dícele Pedro: *Aunque me vea en el trance de morir contigo*, no será que yo te niegue.

AM) Le repuso Pedro: — *Aunque todos fallen por causa tuya*, yo jamás fallaré. 34 Jesús le declaró: — Te aseguro que esta misma noche, antes que el gallo cante, me negarás tres veces. 35 Pedro le replicó: — *Aunque tenga que morir contigo*, jamás te negaré.

BE) Pedro le contestó: — *Aunque todos pierdan su confianza en ti*, yo no la perderé. 34 Jesús le dijo: — Te aseguro que esta misma noche, antes que cante el gallo, me negarás tres

veces. 35 Pedro afirmó: — *Aunque tenga que morir contigo, no te negaré.*

するとペドロが、「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」と言った。34 イエスは言われた。「はっきり言うておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」35 ペドロは、「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどは決して申しません」と言った。

AM) においてのみ接続法未来の使用が見られ、ヴルガタ訳の先立未来または接続法完了との対応が見られる。

譲歩の副詞節の項目として独立させたが、古典語においては、条件節との区別は接続詞 *ei, si* を見る限り必ずしも明確ではない。例えばギリシア語原典では、第33節は、*ei* + 直説法未来受動相3人称複数であり、この節を単独で見ると、通常条件節と変化が無いように思われる。¹⁶ ちなみにスペイン語において、*si* + 直説法未来の構文は文法的に誤りとされる。他方、第35節においては、*κᾶν* (*καὶ ἔάν* < (*ei ἄν*)) + 接続法の構文であり、明らかに譲歩節であることが分かる。

法時制に関してすべての版に共通する点は、帰結節が直説法未来を採っていることである。さらに帰結節において、否定詞は以下に示す様に多様であるものの、動詞はヴルガタ訳およびすべてのスペイン語訳が *negare / negar* である。スペイン語訳において、ME) と Bover 訳第33節を除いて、譲歩節の接続詞は *aunque* であり、接続法現在とともに用いられている。一方、譲歩節内の動詞、特に第35節の義務あるいは必然性の表現は多様である。

図式的に整理すると以下のようになる。

	譲歩節	(lat. <i>negare</i> / esp. <i>negar</i>)
ME) Si 接続法未来	: fueren + 過去分詞 <i>escandalizados</i>	<i>numqua</i> 直説法未来受動形
	Aun si 接続法未来	: <i>me conviniere</i> + 不定詞句 <i>non</i> 能動形
RV) Aunque 接続法現在	: sean + 過去分詞	<i>nunca</i> 直説法未来受動形
	Aunque 接続法現在	: <i>me sea menester</i> + 不定詞句 <i>no</i> 能動形
Gr. Ei 直説法未来	: <i>σκανδαλισθήσονται</i>	<i>ουδέποτε</i> 直説法未来受動形
	Κᾶν 接続法現在	: <i>δέη</i> + 不定詞句 <i>οὐ μή</i> 受動形
Lat. Et si 先立未来 (接続法完了)	: 過去分詞 + fuerint	<i>numquam</i> 直説法未来受動形
	Etiam si 先立未来 (接続法完了)	: <i>oportuerit</i> + 不定詞句 <i>no</i> 能動形
B. Cuando 接続法現在	: se escandalicen	<i>nunca jamás</i> 直説法未来能動形
	Aunque 接続法現在	: <i>me vea en el trance de</i> + 不定詞句
		直説法未来: <i>no será que</i> + 接続法現在

AM) Aunque 接続法現在： fallen	jamás	直説法未来能動形
Aunque 接続法現在： tenga que + 不定詞句	jamás	同
BE) Aunque 接続法現在： pierdan	no	同
Aunque 接続法現在： tenga que + 不定詞句	no	同

一覽して注意を引くのは、スペイン語の接続詞が3種類、あるいはME) *aun si* を別途数えれば4種類見られることである。しかも、基本的な意味・用法は、それぞれ *si* 条件・*cuando* 時・*aunque* 譲歩である。まずヴルガタ訳との関係で、3言語対訳版の Bover 訳が、本来時の接続詞である *cuando* を *et si* (または *etsi* : 譲歩の接続詞) に対応させている点である。むろんスペイン語の *cuando* 自体にも譲歩の用法は存在する。しかし、Bover 訳第 35 節およびレイナ・バレラ以下すべてのスペイン語訳が、譲歩の接続詞句 *etiam si* に対して、端的に譲歩の用法を表す *aunque* を用いている中で、何故 *cuando* を用い、さらに動詞の法時制を接続法未来ではなく接続法現在としたのであろうか。筆者は *aunque* + 接続法未来の用例が見出されないことと、レイナ・バレラ 1909 年版 RV) において、第 33 節の受動形助動詞としての *ser* が *sean*、第 35 節の本動詞としての *ser* が *sea* といずれも接続法現在になっている点に注目したい。すなわち、未完了か完了かという視点から見れば、未完了である。主節に対する関係を消去法的に言えば、完了ではなく、少なくとも時系列上の前時性や先行性は含意しないと考えられないだろうか。また完了により示される先行性は因果関係における原因としてもとらえられる。ゆえに、スペイン語の条件文において、主節あるいは帰結節の動詞が直説法未来や命令およびこれらと同値の語形を採る場合には、条件節は現代語では通常、直説法現在形であるが、多くは本来、接続法未来形を採るべきであろう。

ところで、この 26 章 33 節・35 節の譲歩文はペドロが話者である。ペドロが譲歩の対象とする事柄は、イエスに躓く自分以外の同僚たちであり、イエスと死を共にすることである。これらの二つの事柄は、ペドロがイエスの弟子であることを貫徹しようとする際に設定される環境ではあっても、意思を貫徹する原因ではない。すなわち、ペドロの当初の決意では、ペドロの意思と二つの事柄は常に並立・並行したまま話が進行するはずであった。これを副詞節と主節の関係からみると、両者は時系列上や原因とそれに対する反応や結果といった関係ではなく、むしろ同時的・並立的関係と考えられる。ゆえに、接続法未来やラテン語において完了時制の語幹を持つ語形の使用を避けようとしたのではないか。この点、ME) とヴルガタ訳は、譲歩節に先行性も認めるやや異なったアスペクトを表しているとも言える。

接続法未来の後退の原因は、今までの論考で、語形の複雑さと他の法時制、特に接続法 *ra* 形との競合など、いくつか指摘してきた。もう一点指摘し得ることは、場所の

副詞節において見られるように、未来における完了、すなわち前時性・先行性の意識が現代語において希薄になっていることが、接続法の不定・未定性にさらにもう一つ完了の要素を持った語形の使用を衰退させたということである。その点、最後に検討した譲歩の箇所は、逆に未来時制における前時性・先行性が、むしろ意識的に退けられた比較的稀な例とも考えられる。

以上で、マタイ福音書諸版における接続法未来の用法の検討を終わる。

¹ 再帰代名詞 *se* の母音 *e* の脱落については、T. Montgomery, *op.cit.*, p.84: *el pronombre enclítico* 参照。後者の未来形において代名詞が語尾と語幹の間に入り動詞の要素を二分する場合には、T. Montgomery, *op.cit.*, p.132: 75 *El tiempo futuro* (2). 参照。

² 岩隈直, *op.cit.*, p. 95 参照。

³ 白水社「現代ポルトガル語辞典(改訂版)」p.908 r.

⁴ 後接代名詞 (*pronombre proclítico*) の母音の省略 (*elisión*) については、T. Montgomery, *op.cit.*, p.85 参照。

⁵ 岩隈直訳注『希和対訳脚注つき新約聖書Ⅲβルカ福音書下』山本書店、1978、p.86(17,37):「『死体のある所に鷲(秃鷲)が集まる』というのは諺であろう(ヨブ39,30参照)。しかしこの適用の意味は、人の子の到来は、鷲が死体を集まるのが人にははっきり分るように、人びとにはっきり分るというのか、それとも死体があれば必ず鷲が集まるように、人の子の到来も不可避的だということか。その他諸説ある。」

⁶ “La Biblia de Estudio”, p. 1584: “Expresión proverbial; aquí puede sugerir que la venida del Hijo del hombre estará acompañado de signos evidentes a todos, así como la presencia de un cadáver en le desierto se da a conocer por los buitres que se reúnen (cf. Job 39.30).”

⁷ “El Nuevo Testamento según el Manuscrito Escorialense I-I-6 Desde el Evangelio de San Marcos hasta el Apocalipsis Edición y Estudio de Thomas Montgomery y Spurgeon W. Baldwin”, Madrid, 1970, p. 135.

⁸ T. Montgomery, *op.cit.*, p.145. なお、原形と考えられる *allegar* の語源が果たして *llegar* なのかが必ずしも明確ではない。cf. *op.cit.*, p.183.

⁹ T. Montgomery, *op.cit.*, p.189; p.212.

¹⁰ “Instituto <Francisco Suarez> Colección de <Biblias Medievales Romanceadas> Biblia Medieval Romanceada Judío-Cristiana Versión del Antiguo Testamento en el Siglo XIV, sobre los textos hebreo y latino Edición y estudio introductorio por el P. José LLamas, O.S.A. vol. II. Paralipomenos-Macabeos”, Madrid, 1955, p.228. “Biblia Medieval Romanceada Judío-Cristiana”が底本とした14世紀の写本は、Ms. Escorialense I-I-4. cf. *op.cit.* vol.I, LV.

¹¹ T. Montgomery, *op.cit.*, p.188.

¹² Santiago Segura Munguía, “Diccionario Etimológico Latino-Español”, Madrid, 1985, p.764 dr.

¹³ ヘブライ語原典 Job30,39 は次のとおりである。 **וּבְאֲשֶׁר חֲלָלִים, שָׁם הוּא**
筆者が現時点でスペイン語との対応で説明可能なことは、次のとおりである。(右から)

接続詞+前置詞+関係副詞 死骸(複数形), 場所の副詞 代名詞(3人称男性単数形)
動詞は直接表れていないが、代名詞が繫辞として機能する場合もあり、いくつかのスペイン語訳であえて、*está ella* といささかぎこちなく訳出したのも、それ相応の理由があると思われる。

¹⁴ ラテン語における未完了時制受動相における統合語形(単独形)は、直説法:現在・未完了過去・(未完了)未来;接続法:現在・未完了過去;命令法:現在・未来;不定法:現在である。

¹⁵ このスペイン語 *dicho sera (será)* を逐語的に *dictum erit* としたら古典文法では未来完了になるであろう。

接続法未来の後退に関する一考察：マタイ福音書諸版をめぐって（5）

また未来分詞 *dicturum* があるが、能動の意味であり、動作主が明示されていないことから対応させるのは無理である。ちなみに *dicturus sum*（私は語ろう・語るであろう）。

¹⁶ 田中・松平『ギリシア語文法』p.183: 438 参照。

